



つれづれ時事寸評 5

離島の情報と福祉

守弘 仁志

数年前まで離島の情報化の問題について調査研究を行っていた。その中でも一番の「条件不利地域」にあたるのが沖縄県島尻郡北大東村ではないかと思う。北大東村は沖縄本島から東に約400kmの太平洋海上にある北大東島に位置し、大東諸島の一つである。北大東村（島）は面積約12.5平方キロメートル、人口約500人ほどの小さな村（島）である。半径約350kmの範囲の中で人が住んでいるのは約12km離れた南隣の南大東島（南大東村、人口約1200人）のみであり、この両島はまさに「絶海の孤島」である。

私たち調査グループはこの島の交通・通信状況がきわめて不利な位置にあるのに注目して研究をおこなったのである。通信や放送は有線回線が本土や沖縄本島との間でつながっておらず、すべて通信衛星によっている。なにしろテレビが見られるようになったのが1975年のことだが、NHKや民放のテレビ番組が同時放送で見られるようになったのは10数年前、携帯電話が導入されたのが10年ほど前である。島外との飛行機便は1日1便夕方のみ、生活物資を運ぶ船はだいたい一週間に一度ほどである。無人島だったのが100年ほど前に開拓された新しい島である。開拓時の事情で住民の出身地もいくつかに分かれ、暖

かな気候と土壌の特殊さから先ずはサトウキビ生産が始まった。また鉱山でリン鉱石が採掘され、特に戦前期には火薬などの原料などの採掘のための大きな鉱山ができて当時の人口は数千人であったとのことである。しかし、リン鉱石は戦後の乱掘で枯渇してしまい、サトウキビ栽培と精糖を主な産業とする農業の島になった。



北大東村の風景

10年ほど前までは、医療に関しては一週間に一度那覇から飛行機で医師が来て診療所で診療し、また帰ってゆくという状態で、急病人が出ると自衛隊に空路輸送を緊急要請して那覇空港まで搬送し、そこから救急車で病院に行くということだった。特に急病人発生が夜間だと村役場の職員総出で北大東空港に夜間着陸用の燈火を並べに行くのだという。また、福祉に関しては高齢者福祉施設に入るには島外（沖縄本島）に行くしかなかった。このような中で住民の生活、特に高齢者にとってはそれなりにきびしく、島に住んでいる単身や夫婦の高齢者に対しては子ども（働き口を求めて那覇などの沖縄本島に移住していった若者は多い）などが自分のところに引き取

る例が多いということだった。島の生活は先祖以来というわけではなくもともと二～三代ぐらいしか続いていないので、結局一家で島を引き揚げてゆくことになる。村の総務課長さんが言っていた「私は"引き揚げ"という言葉が嫌いです。この島を見捨ててゆくわけですから。」という言葉が記憶に残る。また、若者についても島内の出産設備がないことから、妊婦は出産近くになり飛行機の搭乗が制限される前に沖縄本島に行き出産してから子どもと共に島に戻るという。

しかしこのような島で島民の日常生活はのんびりしたものであった。まず朝の早い時間に起きてサトウキビ畑の作業をして、暑い昼間は家で休み、夕方、また畑での作業をする。夜は家族と過ごしたり仲間とカラオケをしながら泡盛を飲むという生活だという。孤立した島でよそ者はほとんどいなく島民全体が知り合いだから温かな人間関係である。

また沖縄のお盆（旧盆）にはお祭りが開かれエイサー（盆踊りのようなもの）で盛り上がる。一度、お盆に現地に行ったことがある。調査は実施しにくかったが、島民の結束性がみえた。まず島全体がすべてがお祭り中心になる。先ず商店などは事実上休業で公的機関も限りなく休業に近く、空港や公的宿泊施設などは常勤職員が島民でお祭りに参加するため島外から臨時の補充用職員が呼ばれ仕事をする。最後の晩には小中学校の校庭に櫓が組まれ盆踊り大会が開かれる。周囲は地区ごとにシートが敷かれ住民が泡盛を酌み交わしている。また中央では学校の先生たちなどが歌

を披露し、島民がそれに向け声をかけたりしてまさに島民全員参加で盛り上がる。

最近では島の状況は少しばかり変わったようだ。医療は診療所に沖縄本島からの医師が派遣されてくるようになった。高齢者などの福祉サービスを行う保健福祉センターができた。また、来年には地上波デジタルテレビの放送のため海底光通信ケーブルが敷設されるという。これにともなって電話回線も高速化されインターネットなども容易になる（二年前にようやくADSLになったばかりだが、さらに改善される）。このように情報は十分に入るようになり、福祉も充実してきて便利になり、形式的には住みやすくなったはずである。また「秘境」を求めてやってくる観光客も増



島の周囲の崖と荒れた海

えたという。

情報化と福祉の充実がすすみつつも、従来からの暖かで緊密な島民の人間関係が維持できるならば北大東村（島）は過疎地ながらも住みやすい社会を必ず維持できるだろうと、調査に応じて話をしてくれた島民の人々の柔らかな顔を思い出しながら思う。

（本学研究所研究員 広報論）